

竹内けん

挿絵:風丘

2DB  
二次元ドリーム文庫



# ハレカリス

◆ 王家寝取り物語 ◆

試し読み版

# Characters

## 人物紹介

### ヴァルヘルミナ

ルークシードの家の隣に越してきた姉妹の姉で彼の初恋の人。優しいお姉さんだが、類い稀な美貌を持っていたために、ある日突然国王の寵姫として後宮にあがることとなる。





## エルフリーデ

ヴィルヘルミナの妹。女の身でありながら将軍を目指す凛々しい女騎士。副官のルークシードとともに次々と戦果をあげていくが、彼に対しては思うところがあるようで……？

## ルークシード

ニーデンベルグ王国に住む青年。女将軍を目指すエルフリーデの副官として活躍しているが、その目的は初恋の人ヴィルヘルミナを国王から取り返すことだひとつ……。

第一章	隣の美人姉妹	009
第二章	戦乙女と従者	065
第三章	宿下がり	106
第四章	運命の一夜	139
第五章	疑惑の子供	175
第六章	国母	221

## 第一章 隣の美人姉妹

「はっ！ たあ！ くっ！ 意外とやる！」

仙樹曆1038年の春。ニーデンベルグ王国の首都イスターシアの中にある、主に役人たちが住む住宅街。

広くはないが狭くもない緑豊かな庭で、木刀と木刀をぶつけ合い、力負けをした少女は弾き飛ばされて尻餅をついた。

瑞々しいピンク色の唇を悔しそうに歪め、顎を滴る汗を右手の甲で拭いながら憎まれ口を叩いた少女の名前はエルフリーデという。年齢は十二歳。貴族の娘だ。いや、貴族の当主の妹だ。

つい最近、生まれ育った屋敷を引き払って、この家に引っ越してきた。女騎士の練習用の服装である黒いタイトなレオタードを着用している。

絹糸のように艶やかな黄金の頭髪を、肩口でぶつとりと切り揃え、その下から覗く眉は細く整えられ、釣り目がちの切れ長の目の奥で、翠色の瞳が生氣に満ちて爛々と輝いている。ツンと尖った鼻と鋭角な顎を持った整いすぎたと称したくなる美貌だ。

この年代の少女らしく、手足はひよろりと細く長い。体にぴったりとフィットしたタイ

トな服装越しにわかる胸のふくらみはかなり残念だった。

年齢相応の体型とはいえ、スタイルはかなりいい。体に比べて顔が異様に小さいのだ。八頭身。いや、八頭身半の体型だった。

人形めいた完璧すぎる美貌だが、全身汗に塗れてなお戦意を失っていない眼光。そして、猛々しい表情は、さながら気高い野生の獣のような雰囲気を感じさせた。

「そっちこそ、女にしてはなかなかだ」

木刀を肩に担ぎながら応じた少年の名はルークシード。

年齢はエルフリーデと同じだ。隣の家にも古くから住んでいる。おかげでエルフリーデとは同じ幼年学校に通うことになった。

だからこそ、休日に武芸の稽古を一緒にしているのだ。

ただし、ルークシードは、貴族ではなく、ニーデンベルグ王国の官吏の息子だ。中産階級のどこにでもいる普通の少年と違って過不足なく表現できるだろう。

貴族の家と、官吏の家がなぜ隣同士なのかといえば、先日、エルフリーデとその姉が引越してきたのだ。

彼女の母親は早くに亡くなり、父親は先の戦いで討死した。

その後、相続問題でいろいろあったらしく、屋敷と財産の多くを奪われて、庶民の住宅街に引越す羽目になったらしい。

この少女はそれが悔しいらしく、女騎士として出世して、大人たちを見返してやる、という野心に燃えている。

そのため稽古に熱心であり、ルークシードは付き合っていてやっているのだ。

「言ったな！」

負けん気の強い少女は憎々しげに応じると、両脚をひょいっとあげてから軽やかに跳ね起きた。

ちようどそこに、女性の優しいげな声がかかる。

「ルーク、エル。そろそろ休憩にしたらどうかしら〜♪」

声の方向に目を向けると、春、爽やかな陽射しの中、けぶるような金髪をした女性が出た。

春らしい薄いピンク色のワンピースを着て、大きなつば広の白い帽子をかぶっていた。

その帽子を春風に飛ばされないように左手で押さえつつ、右手には大きなバスケットを持参している。

エルフリーデの姉、ヴィルヘルミナだ。芳紀まさに十七歳。

それは驚くほどの美少女だった。いや、美女である。

妹よりもより濃い光の滝のような長い金髪と、けぶるような睫毛<sup>まげ</sup>。そして、妹と同じ翠の瞳には柔らかい色が浮かぶ。艶やかなピンク色の唇にも親しみやすい笑みが作られてい

た。

体の線を隠すワンピースを着ているのに、胸元では二つの双乳が大きく突き出し、腹部は縊くびれているのに、臀部でんぶは蜜蜂のように張っている。

ルークシードの十二年の生涯にあつて、これほど美しい女性をみたことがない。あるいはこれからもみることはないのではないだろうか。そう思えるほどの完璧な美貌であつた。エルフリーデもおそらく、五年後には姉に負けない美人に育つとは思うが、なにせ気が強い。姉ほどの包容力を感じさせる女性にはならないだろう。

両親を失つて、生まれ育つた屋敷を追われるという不幸に見舞われても、年若い女の身で当主として必死に妹を守り育てている。見た目通り、聖女のような女性なのだ。

優しく面倒見がよく、料理ができ、家事をこなす。年齢は五歳しか違わないとはいえ、エルフリーデから見ると、母親のような存在でもあるだろう。

「サンドイッチを作ってきたわよ」

「あ、ありがとうございます」

ヴィルヘルミナの麗姿をまえに、ルークシードの顔がトロリと蕩とろける。

ヴィルヘルミナとエルフリーデ。この天使とみまごう美人姉妹が、隣に引越してきたとき、ルークシードは度肝を抜かれた。

世の中にこんな綺麗な女性がいるのだろうか、と思つたのだ。



中でもこの姉のほうに一目惚れした。いわゆる初恋というやつである。

このお姉さんと少しでも仲良くなりたくて、我儘なエルフリーデとの稽古に付き合っているという側面もあった。

姉の姿をみて、やにさがった表情になる同級生の少年の顔をみて、エルフリーデは少しむつとする。そして、木刀を振りかぶった。

「隙あり！」

「えっ!？」

綺麗なお姉さんに気を取られていたルークシードは、気の強い同級生の切っ先を避けきれなかった。

ボコッ!

木刀がもろに頭に入った。

「まあ」

ヴィルヘルミナの驚きの表情をみながら、ルークシードの視界は暗転した。

※

「……」

ルークシードが気づいたとき、右側に壁があり、前方に大きな庇ひさしが突き出ていた。その向こうに青空に舞う花吹雪がみえる。

(ここは天国だろうか?)

呆然ぼうぜんとしていると、庇の向こう側から、麗しい天使の顔が出てきた。

「あら、よかった。気が付いたのね」

庇と思ったのは、ヴィルヘルミナの乳房だったのだ。

どうやら先ほどまで武芸の稽古をしていた庭の芝生の上で、正座したヴィルヘルミナに膝枕をされて休まされていたらしい。

ヴィルヘルミナの右手側に、両足を投げ出した形で仰向けに寝かされていた。

「ヴィルヘルミナお姉ちゃん……」

「魔法治療を施したから、大丈夫だと思うけど、まだ痛い？」

「いえ……」

恋焦がれているお姉さんに膝枕をされていることに気恥ずかしさを覚えたルークシードは、すぐに身を起こそうとした。そこをヴィルヘルミナの左手で頭を押さえられる。

「すぐに動くのはよくないわ。もう少し休んでいきなさい」

「……はい」

ルークシードは素直に、体から力を抜いた。

後頭部に初恋のお姉さんのぬくもりを感じる役得。まさに不幸中の幸いである。  
「ごめんなさいね。もうエルったら、乱暴者なんだから」

「エルフリーデは？」

先ほどまで一緒に稽古していた気の強い少女の姿は、辺りにはないようだ。

「あの子は、乗馬の訓練をするんだって飛び出していったわ。残って謝るように言ったんだけど、軟弱な男に興味はないって言って。まったくもう少し自分のナイトさんには優しくすべきだと思っただけだね」

「ナイト？」

困惑するルークシードに、ヴィルヘルミナは優しく笑いかける。

「あら、ルークはわたくしたちのことを守ってくれているんでしょ？」

「そ、それは……はい」

両親を早くに失い財産を奪われるという、世知辛い世間の荒波に揉まれながらも二人っきりで寄り添いながら生きている美人姉妹。

無力な子供である自分になにができるかわからないが、彼女たちをできるだけ守ってやりたい、いや、守るんだ。とルークシードは心の中でひそかに決意していたのだ。

そんな内に秘めた決意を認められていたのだと知って、ルークシードは嬉しくなる。

「エルフリーデはちよつと素直じゃないから口にしなないけど、ルークには感謝しているのよ」

「いえ、そんな、当たり前のことをしてるだけです。ヴィルヘルミナお姉ちゃんとエル

フリーデは、なにがあってもぼくが守るよ」

「まあ、ありがとう。わたくしたちの小さなナイトさん」

正面切って感謝されたルークシードは恥ずかしくなり、ヴィルヘルミナの視線を避けるためにうつ伏せとなった。

スカート越しとはいえ、ヴィルヘルミナのぬくもりが感じられて心地よい。

思わずルークシードは、ヴィルヘルミナの左右の太腿の付け根の真ん中に、顔を突っ込み、鼻で思いつき深呼吸してしまった。

「スー……ハ……ヴィルヘルミナお姉ちゃんからいい匂いがするよ」

「あん、そんなところの匂いを嗅ぐだなんて……」

ルークシードとしては、特に他意のない行動だったのだが、スカート越しの股間に、顔を埋められて深呼吸をされたヴィルヘルミナはなぜか動揺する。

無垢な少年に、股間の匂いを嗅がれていた年頃のお姉さんは、しばし硬直していたが、ややあつて緊張した声で提案してきた。

「あ、あの……、ルーク、ちよ、ちよつとだけ動かないでね」

「うん」

大好きなお姉さんのぬくもりと匂いを、顔全体で楽しんでいたルークは、深く考えずに頷いた。

すると、妙に荒い呼吸を繰り返して、モジモジしていたヴィルヘルミナの右手が、ルークシードのズボンをまさぐりだした。

「？」

戸惑っているうちに、ズボンと下着を下ろされて、逸物を露出させられてしまっていた。そして、柔らかい織手に握られる。

「な、なにを……!？」

驚き身を起こそうとするルークシードの頭を左手で押さえて、自らの太腿に押し付けながら、ヴィルヘルミナは右手で逸物を優しく握ってくる。

「ここ、わたくしに触られるの、イヤ？」

「いえ……べ、別にいいけど……」

「そうよかった。なら、もう少し触らせてね」

ルークシードが逃げ出さなかったことに安堵したような声をもらしたヴィルヘルミナは、毛の一本も生えていない、包莖お子様おちんちんを興味深そうに弄もてあそんだ。

やがて彼女の手中のものが変化する。

「あはっ、固く、大きくなってきたわね」

大きくなったといっても十代前半、まだ精通もしていない少年の逸物である。勃起ぼつきしたところで大きさなどが知れている。ヴィルヘルミナの掌にすっぽりと包まれてしまう

程度だ。

「はあ……はあ……はあ……」

憧れていた綺麗なお姉さんの股間から立ち上る甘酸っぱいミカンのような香りを嗅ぎながら、いきなり逸物を捕らえられて悪戯されてしまった少年は、頭の中が真っ白になってしまい、満足に呼吸もできない。

ドキドキドキ……

心臓が喉から飛び出してきそうさだ。

(なにをされているんだ、ぼくは……で、でも、ヴィルヘルミナお姉ちゃんがやることだし……変なことじゃないはずだ)

少年の常として、綺麗なお姉さんは無条件で正義だと信じるルークシードは、なにが起こっているのかわからないが、ヴィルヘルミナのスカート越しの股間に顔を突っ込んだまま、必死に身を固くして耐える。

しばし少年の勃起おちんちんを弄んでいたお姉さんは、やがて肉幹を軽く抓んでシコシコと扱とぎだした。

「痛かったら言っつてね。男の子はここをこうやってさすられると気持ちいいって聞いたことがあるんだけど……」

「はう……はう……き、気持ちいい、です……」

初恋の綺麗なお姉さんに、逸物を扱かれた少年は、呼吸困難となって喘ぐことしかできなかつた。

左手でルークシードの頭髮を優しく撫でながら自らの股間に押し付け、ヴィルヘルミナの右手はシコシコと若い肉幹を扱く。

「はあ……、はあ……、はあ……」

うつ伏せのルークシードはみることができなかつたが、もし仰向けになつていたらヴィルヘルミナのかつてない表情をみることができただろう。

綺麗な聖女の如きお姉さんの頬は紅潮し、翠の瞳が収縮している。逆に二つの鼻の孔が広がり、半開きの唇から熱い吐息を洩らしている。

幸いなことに憧れのお姉さんのイメージ崩壊を起こす表情をみずに済んだルークシードは、ヴィルヘルミナの言いつけを必死に守り、なにをされても動かないつもりだったのだが、やがて耐えがたい生理欲求に襲われて慌てた。

「あ、あの……ヴィルヘルミナお姉ちゃん、その、そこ……触られていると、その……お、おしつこが、で、でそう……」

「大丈夫よ。そのまま出しちゃつていいから……」

シコシコシコ……

上ずつた声を出したヴィルヘルミナの肉棒扱きは、さらに激しいものとなった。





見事な桃尻である。プリンプリンだ。芸術的とさえ言える。

思わず見とれてしまったルークシードであったが、ややあって我に返り口を開く。

「本当にするんですか？ エルフリーデさまは若くして將軍職にまで昇ったのです。その気になればいくらでも良縁を望めるでしょう。本当に好きな相手のために純潔は取っておいたらどうですか？」

ルークシードの真摯な説得に、なぜかエルフリーデは激怒する。

「まだそんなことを言っているのか。あたしは結婚するつもりはない。恋愛するつもりもない。ただ邪魔な性欲を解消したいだけだ。ぐだぐだ言っていないで、貴様のその二束三文の肉パイプを入れろ」

「はあ〜」

主君の剣幕から翻意させるのは不可能だと察したルークシードは、大きく溜息をつく。

「忠良なる臣下としましては、エルフリーデさまにはぜひ幸せになってもらいたいのですがね」

これはルークシードの嘘偽りのない気持ちである。

ルークシードはいずれ、国王を殺して、ヴィルヘルミナを取り戻す予定だ。

そのために本心を偽ってエルフリーデを利用してはいるわけだが、六年も共にいれば家族的な愛情も芽生えようというものだ。

エルフリーデの幸せを心から願っている。

「うるさい。グダグダ言うな」

「はいはい」

諦めたルークシードは、その場にしゃがみこみ、プリンプリンの尻を両手に取って、肉裂に顔を埋め、ペロリと舐めた。

「はぁん♪」

甘い喘ぎ声をあげて、猫のように跳ねたエルフリーデは動揺した声を出す。

「ちよ、ちよつとまで。あたしはおちんちんを入れろと言ったんだ。そこを舐めろとは言っていないぞ」

「入れるなら舐めないわけにはいかないでしょ。まして、エルフリーデさまは処女なんですから」

ルークシードの指摘に、エルフリーデは驚く。

「あ、あたしが処女だなんてなんでわかる!!」

「いや、わからないはずがないでしょ」

女將軍になりたくて、稽古と勉強ばかりしてきた女である。男つ気はまったくなくない。そのことは身近にいたルークシードがだれよりも承知していた。

それに現在、ルークシードの鼻腔には、甘いチーズのような処女臭が、プーンと漂って

きている。

「そ、そうか……。べ、別に貴様にやりたくととっておいた処女じゃないからな。か、勘違いするなよ」

「承知していますよ」

ルークシードは主君の肉裂から溢れ出る清水を、丁寧に舐めしやぶった。そして、頃合を見計らって肉裂を開く。

薔薇の花のような艶やかな秘肉があらわたとなる。

ついでに膣孔の四方に指をあてて開けば、薄い半透明の膜をみる事ができた。三つ穴が開いている。いわゆる、三つ穴状処女膜というやつだ。

「綺麗なオ○ンコですね」

「み、みるな。いや、と、特別だからな。き、貴様にだけみせてやるんだからな。あ、ありがたく思えよ」

「ええ、ありがたく舐めさせていただきます」

ルークシードは、愛する女性の妹の陰唇を陰核から尿道口、そして膣孔まで舌先で丁寧に舐めた。

「はあ……はあん……こ、これは……予想以上に恥ずかしい……。世の女たちは、あの姉上もこんな恥ずかしい思いをしているのか……はあん♪」

エルフリーデは机に突っ伏して、羞恥の衝動に耐える。

「男にオ○ンコを舐められているのではなく、男に舐めさせているのだ、と考えればいいのではないですか？」

ルークシードのアドバイスに、エルフリーデは頷く。

「そ、そうか？ あたしは舐められているのではなく、舐めさせている……ふあん。あたしはバカ犬に無理やりオ○ンコを舐めさせている……くう。舐めさせているだけだ……あひい♪」

机にしがみついたエルフリーデは、男勝りの女將軍という自分のアイデンティティを保つために、必死に自分を説得しているようだ。

その間にもルークシードの舌は縦横無尽に動く。

ピチャピチャピチャ

「ああ、あああん♪ そ、そこに舌を入れるのは、ひいあん」

気難しい女騎士の膣孔をほぐすために、ルークシードの舌先は、膣孔に潜り込んだ。グリグリと肉穴の入口を拡張し、さらには処女膜の表面まで舐めてしまう。

「も、もう……らめええええ」

ブルブルと震えたエルフリーデは、机に突っ伏して脱力した。

ルークシードが陰唇から顔を離して立ち上がると、エルフリーデは左頬を机に付けて呆

けていた。

エルフリーデはあくまでも幼馴染、親しみはあっても性欲の対象としてみたことなか  
ったルークシードだが、ここに来て抑えがたい肉欲衝動に突き動かされる。

先ほどエルフリーデに悪戯されてから、ずっと露出していた逸物が痛いほどに軋むのを  
感じた。

本能的にそれを構えながらも、脳裏に残ったいつぺんの理性が言葉紡がせる。

「本当にいいですね」

「ああ、か、かまわん。早くしろ。ほら、主君を楽しませるのも、部下の大事な仕事であ  
ろう。とつとつその薄汚いちんぽをあたしに入れろ」

エルフリーデに挑発されて、ルークシードは我慢ならなくなった。

いきり立つ逸物を、濡れそぼった薔薇の花びらの如き女唇に添える。

「はっ」

エルフリーデは息を呑み、細い肩を震わせた。

いきり立つ逸物を、狭い穴の中へとゆっくりと押し込む。

龟头部にたしかな抵抗を感じる。先ほどみて、そして舐めた、三つ穴状処女膜であろう。  
それを力づくで押し破る。

プッン！

「ひっ！」

ピクンとエルフリーデの背中が跳ね上がった。入口さえ突破してしまえば、あとは道なりだ。

狭い隧道すいどうを押し広げながら、根元まですっぽりと潜り込む。

「大丈夫ですか？」

「痛い。滅茶苦茶痛い。セックスというのは気持ちいいものではなかったのか」

驚愕に目を見開き非難してくるエルフリーデのくびれ腰を、両手で押さえながらルークシードは応じる。

「最初は痛いんですよ。我慢してください」

「くっ、主君にこんな痛い思いをさせるとは何事だ」

涙を浮かべたエルフリーデは両肘を机につき、プルプルと震えている。

破瓜のときの女独特の、ギチギチな膣圧にルークシードも痛みを感じるほどだ。

「そんなに痛いなら、抜きましょうか？」

「ダメだ。抜くことは許さん」

顔をこわばらせながらも、エルフリーデは断固として命じた。まったく我儘な女である。ルークシードは悶える女の腰を必死に押さえつけ、エルフリーデが慣れるのを待つ。

「ふ、太い……。それに固い。ガチガチの肉棒が、奥に届いている。ああ、自分でも触っ

たことのないところにピトって。これ、ヤバイ……き、気持ちいい……かも」

「そうですか。それはよかった」

「う、動いていいぞ。おまえの汚いおちんぼで、あたしの中をグリグリしてくれ」

まだ声をこわばらせながらも、エルフリーデは命じてきた。

「承りました」

ルークシードは慎重に腰を引き、そして、押し込む。

「はう、奥にちんちんがピトつと着くの、ヤバイ、まるで子宮にキスされているみたい」

どうやらエルフリーデは、子宮口を龟头部で押されるのが好きな女のようなのである。

破瓜の痛みは残っているようだが、それ以上に未知の快感に歓喜しているようだ。

そこでルークシードは意図的に、子宮口を龟头で押してやる。

「ひい！ おちんぼ、ちゅごい、気持ちよすぎる、ひいあん♪」

兵士たちに鬼女のように恐れられる女將軍は、男に背後から犯されて自慢の美脚を無様なガニ股開きにしてヒクヒクと痙攣させている。

不意にルークシードが見下ろすと、ヒクヒクとエルフリーデの肛門は痙攣していた。

(ヴィルヘルミナさまっ!?)

ルークシードは強烈な既視感を覚えた。

エルフリーデとヴィルヘルミナは美人姉妹とはいえ、金髪と翠の瞳が同じであること以

外はまったく似ていない姉妹であった。しかし、本気で感じだすと肛門が痙攣するという体質は同じようである。

そうみて取った瞬間、ルークシードの中の理性が飛んだ。

「あ、ダメ、そんなに激しくされたら、ああ、奥が、奥が、奥が」

エルフリーデの制止を無視して、ルークシードは欲望のままに腰を振るった。

ズコ！　ズコ！　ズコ！

（このザラザラでヌルっとした感じ、ヴィルヘルミナお姉ちゃんのオ○ンコに似ている。やっぱり姉妹ということか）

思い入れのみせる錯覚のなせる業なのかもしれないが、ルークシードはたまたまなくなってしまうた。

「ああ、ああ、あああ」

エルフリーデの悲鳴がとめどなく聞こえる。それを無視して腰を思いつき振りまくったルークシードは、最後に逸物を押し込み、子宮口に亀頭部を押し付けたまま射精した。

ドビュビュビュ!!!

「ひいひいひいひいひいひいひい」

甲高い牝の悲鳴を聞きながら、思う存分に欲望を解き放ったルークシードは、我に返って慌てる。







「乳首だけでイってしまっただんですね。相変わらずエロい体だ」

「……」

拒否していたにもかかわらず、あっさりといかされてしまった己が身を恥じるように、ヴィルヘルミナは含羞を噛み締める。

「そろそろ我慢できないんじゃないやありませんか？」

ロングスカートをたくし上げようとしたルークシードの右手を、ヴィルヘルミナは慌てて押さえた。

そして、すがるような目で背後をうかがう。

「く、口でするから、それで許して」

ヴィルヘルミナからの妥協案を受けて、ルークシードは熟考する。

（まあ、少しずつ昔のことを思い出させてやればいいか。どうせ、最後には自分から股を開く。それがヴィルヘルミナさまだ）

いまは王妃としての見栄を張っているだけで、本当の愛は自分のものだと確信しているルークシードは、悠然と手を離れた。

「わかりました。それじゃお願いしますよ」

身の自由を取り戻したヴィルヘルミナはその場でしゃがみこんだ。そして、仁王立ちするルークシードの前に屈みこんで、震える手でズボンの中から逸物を取り出す。

ぶるんと唸りをあげるように飛び出した逸物を見上げて、ヴィルヘルミナの両目は驚愕に見開かれた。

「お、大きい……」

彼女の記憶にある五年前の十三歳の少年の生殖器と、十八歳の青年の生殖器では似ても似つかぬものになっていたのだろう。

以前は仮性包茎だった。ヴィルヘルミナがいつも楽しそうに剥いていた。しかし、いまは赤黒い龟头部がむき出しである。

「ほら、ヴィルヘルミナさまの大好物だったおちんちんですよ」

露悪的に笑ったルークシードは、怒張した逸物でヴィルヘルミナの両頬を往復ではたいてやる。

「や、やめなさい」

不愉快そうに顔をしかめたヴィルヘルミナは、両手で逸物を挟んだ。それから改めてじつくりとみつめる。

「ああ、熱い。それに太くてゴツゴツしている。エルフリーデは、いつもこんな大きくて遅<sup>たくま</sup>しいものを食べているの？」

「ええ、あの人は見た目通り、性欲も強いですからね。ガンガン突いてあげていますよ」  
「こ、これでガンガン……ごくり」

おそろく本人的には意識せずに、貞淑で知られた国王の寵姫は生唾を飲んでしまった。「これつきりだから。これつきりよ。五年前にできなかったお別れをしましょう」なにやら自分に言い聞かせながらヴィルヘルミナは、ぷるんとした桃色の口唇を開いた。白い真珠のような歯の狭間から濡れた赤い舌を出す。

それが伸びて、尿道口に溜まっていた先走りの汁を、ペロリと舌に舐めとられた。「……」

軽くルークシードの顔を仰ぎ見たヴィルヘルミナの翠の瞳は潤んでいた。

罪悪感からだろうか、いや、違う。ヴィルヘルミナさまは、俺のおちんちんを食べられて喜んでいるんだ。そうルークシードは自らに言い聞かせる。

左手で顔にかかる豊かな金髪を押さえながらヴィルヘルミナは、肉棒の裏の縫い目をゆつくりと舐め下ろしていき、肉袋に達した。

肉袋に接吻し、二つの睾丸をペロペロと舐めてくる。

まるで宝石でも愛でるかのような丁寧な舌使いだ。

(う、巧い……)

その清楚な見た目とは裏腹な、妖艶なる技術にルークシードは震えた。

五年前。包茎ちゃんんにしゃぶりついていたころのヴィルヘルミナは、情熱的ではあったが、それだけだったと思う。

このような練達な技は使つてこなかった。

ルークシードの知らぬ五年間で、男を喜ばせる技を体得した、ということだろう。

後宮ならば、その手の知識は否応なく学ぶ機会はいくらでもある。いや学ばされるのだらう。

あの老醜な男の逸物を、このようにしゃぶっていたのだろうか。そう考えた瞬間、ルークシードの胸中にどす黒い怒りがこみあげてきた。

文字通り怒張する逸物に、ヴィルヘルミナは頬擦りをする。

「あのかわいかったおちんちんが、こんなにすごいおちんちんになっているだなんて想像もしなかったわ。こんなすごいおちんちんで、ガンガン突かれているだなんて、エルフリーデの体は大丈夫かしら？」

悪戯つぼく笑つたヴィルヘルミナは、左手で肉棒の根元を持つたまま先端から啜えた。

「ジュルジュルジュル……」

上品に亀頭部を口唇に啜えたヴィルヘルミナは、舌先で亀頭部全体を舐め回しつつ、左手で肉棒を扱きながら、さらに右手で肉袋を揉んでくる。

（くっ、気持ちいい。それに美しい）

フェラチオをしている姿も、高雅で気品を感じさせる佇まいたたずである。

不意にルークシードは破壊衝動を抑えられなくなった。ついつい露悪的な言葉を浴びせ

てしまふ。

「我慢しないでオナニーしたらどうですか？ ヴィルヘルミナさまは、俺のおちんちんを啜えながらするオナニーが大好きでしょ？」

「余計なことは気にしなくてもいいから。早く出しなさい。時間がないのよ」

ルークシードの下品な物言いに、ヴィルヘルミナは不快そうに眉を寄せて、逸物から口を離して素早く叱責しっせきしてから、再び逸物を啜える。

その手馴れた逸物捌さばきに、さらなる怒りを感じたルークシードは、両手を下ろすと大きな花の髪飾りのついたけぶるような金髪を鷲掴みにしていた。

「うぐっ!!!」

ズボツと逸物が、淑女の喉深くに入った。

「もうグチヨグチヨなんでしょ。ヴィルヘルミナさまのオ○ンコは、とつてもだらしなくて、いつつもおしっこを洩らしたみたいに濡れているんですよね。そこが陛下のお気に召したのかな？ ドスケベオ○ンコが」

ヴィルヘルミナの頭を抱いたルークシードは、荒々しく腰を使う。  
「うぐ、うぐ、うぐっ」

淑女の喉奥が、極太の青年の逸物によってガツガツと犯される。

いわゆるイラマチオというやつだ。脳を振られてしまったヴィルヘルミナは抵抗できず

に、男のなすがままだ。

口を完全にふさがれてしまったヴィルヘルミナは、鼻の孔を大きく広げて必死に息を吸い、目からは大粒の涙を溢れさせている。

絶世の美女が台無しだ。

「あんなクソ爺のおちんちんなんて忘れさせてやります。ヴィルヘルミナさまは俺のおちんちんだけ啜えていればいいんだ。くっ、さあ、俺のザーメンを飲んでください」

獣欲のままに腰を振るったルークシードは、自分勝手に欲望を爆発させた。

ブシュッ

喉奥で勢いよく射精されてしまったヴィルヘルミナはのけ反り、逸物を吐き出してしまった。

ドビュドビュドビュ

宙を舞った白濁液が、ヴィルヘルミナの美貌に降り注ぐ。

「はあ……、はあ……、はあ……」

床に正座したヴィルヘルミナは、天井を見上げたまま呆けてしまっている。

その精液塗れの顔を見て、ルークシードは嘲笑する。

「すっごく似合っていますよ。ヴィルヘルミナさまの顔には、どんな化粧よりも、俺のザーメンがよく似合う」





指を伸ばしたルークシードは、美貌に付着していた精液をこそげ取りヴィルヘルミナの口唇へと押し込んでやる。

「ああ……」

精液を舌で転がして堪能してから、ヴィルヘルミナはコクリと喉を鳴らした。

「どうですか？ 五年ぶりに本当に愛する男のザーメンを飲んだ気分は」

「はっ!？」

呆けていたヴィルヘルミナは、不意に我に返った。

慌てて立ち上がると、レース付きのハンカチを取り出して顔を覆う。

「こんなこと、これつきりよ。わたくしのことは忘れなさい。お願いよ、エルフリーデを幸せにしてあげて」

「ヴィルヘルミナさまは我慢できるんですか？ いまだってオ○ンコグチヨグチヨでしよ」

さらに行為を続けようとルークシードは手を伸ばす。

パン！

いい音がした。ついでルークシードの左頬が熱くなる。

そして、振りきったヴィルヘルミナの右腕をみて、頬を叩かれたのだと自覚した。

「バカにしないで」

ヴィルヘルミナの両目からポロポロと涙がこぼれている。

「もう昔とは違うのよ。わかつて」

「ヴィルヘルミナさま」

「もし、これ以上、続けるというのなら、わたくしは自刃します」

調理台に置かれていた包丁をヴィルヘルミナは手に取った。

ヴィルヘルミナは戦闘の素人だ。軍人としての教育を受けたルークシードが包丁を奪い取ることは簡単に思える。しかし、その覚悟のほどを見せつけられて、それ以上の行為を求めることを、ルークシードはできなくなってしまった。

絶句する陪臣に、包丁を突き付けた王妃は命じる。

「出てって。早くここから出て行きなさい。いまのことは忘れるから。もう二度とあなたとは二人っきりで会わないわ」

「わ、わかりました」

氣迫負けたルークシードは、肩を落として出入口の扉に手をかける。

その背中にヴィルヘルミナはすがるような声を浴びせた。

「エルフリーデと結婚して、早く子供を作りなさい。そうすればわたくしへの思いだなんて、すぐに過去のこととなり、ただの思い出となるわ」

※

ルークシードは、宿敵と思い定めていた男に対して、はじめて共感めいたものを感じた。女に不自由しない、どんな女でも好きなだけ犯せる地位にある男が、夢中になる女というのは、単なる見た目の美しさや人柄の良さだけではなく、膣洞の構造も非凡であった。

単なる膣圧の強さや、ざらつきというだけならば、エルフリーデの膣孔のほうが強烈だった。

それとは対照的に、ヴィルヘルミナの膣洞は、優しく肉棒に絡みついてくるのだ。男を夢中にさせる蜜のような甘さを感じた。

入れたら最後、男は果てるまで、いや、死ぬまで腰を振らずにはいられないのではないかと、と思わせる構造だ。

その欲望に突き動かされそうになったルークシードだが、ぐっと我慢して結合部をしげしげと眺めた。そして、憎まれ口を叩く。

「しかし、昔と逆ですね。昔はヴィルヘルミナさまに毛があつて、毛も生えていない俺とエッチすることに罪悪感を覚えていた。いまは俺に毛があつて、ヴィルヘルミナさまにはない」

「……」

昔の感情を思い出したのか、ヴィルヘルミナは赤面して顔を背ける。

しかし、ルークシードはわざと結合部をみせつけてやった。ルークシードがゆつくりと腰を引くと、女の内臓物がめくれる。

「いやはや、オ○ンコというのは毛がないとこんなに生々しいものなんですわね」

「……」

かつて自分が玩具にした少年からの言葉責めに、ヴィルヘルミナは言葉もない。

「上品ぶつていられるのも今だけです。すぐに昔みたいにヒーヒー啼なかせてあげますよ」

嘯いたルークシードは、ヴィルヘルミナの白い太腿を左右に押し開き、膝から下を天井に向けて立てて、逸物を上下させた。

それも一突き毎に、ドスリと子宮口を打ち据えてやる。それも重く激しい一撃だ。

「くっ、ダメ、そんな、おつきい……。昔よりもすつごく大きくなっている。こんなに大きいおちんちん、ダメ。広がっちゃうわ。オ○ンコが広がっちゃうの」

「広げればいいでしょ。俺仕様の大きさに。俺以外のおちんちんでは満足できない体になればいいんだ」

嘯いたルークシードは、意図的に激しく腰を振るった。

国王ビスマルクが老齢であり、激しい動きはできないだろうことを予測してのことである。

若い牡の獣に荒々しく犯されて、頑なであったヴィルヘルミナの口から嬌声が漏れ始め



「ルーク、あなたが陛下に遺恨を持つ気持ちにはわからないでもないわ。でも、陛下は本当に、よくしてくれているのよ」

「まだそんな建前を言うわけですか？」

イラっとしたルークシードは、ヴィルヘルミナの右脚を抱え上げて左肩に担ぎ、左の太腿を跨ぐ。

ヴィルヘルミナは、左肩を下にした横位となった。

その態勢で、再び荒々しく腰を使い始める。

「老齢の国王に甲斐甲斐しく仕える貞淑な貴婦人など偽物だ。ヴィルヘルミナさまは、俺のおちんちんでぶち抜かれながら、浅ましく腰を振っている姿がとってもお似合いの淫乱痴女なんです。自覚してください。いや、思い出してください」

「あん、あん、あん、あん、ダメ、ダメだといっているのに、ああん、わたくしの体が勝手に、ああん♪ イってしまおう♪ ダメなのに、また、イク——!!!」

横位で絶頂させたあと逸物は抜かず、うつ伏せにして尻を突き出させる。後背位で腰を叩きつける。

「ひい、ひい、ひい、そんな、こんな連続でなんて、ひい」

「あのよぼよぼの爺にはこんな体力はないでしょうからね。ですが、ヴィルヘルミナさまは抜かず三発が好きでしたよね。国王陛下はやってくれますか？」

ヴィルヘルミナは答えない。代わりにお尻の穴がヒクヒクヒクヒクと痙攣しているさまを見下ろして、ルークシードは嘲る。

「覚えていますよ。ヴィルヘルミナさまは背後から獣のようにズコバコと激しく犯されるのが好きなんですよね。そうするとお尻の穴をヒクヒクと痙攣させながら絶頂するんです。知っていましたか？ ヴィルヘルミナさまは本気でイクとき、お尻の穴がすごい動きをするんです。ヴィルヘルミナさまの体のことは、だれよりも、そうヴィルヘルミナさまよりも、俺のほうが詳しいですよ」

「や、やめて♪ こ、これ以上は、ああん、こんなに激しくされたら、わたくし、狂ってしまう♪ わたくし、わたくし、わたくしはあああ♪」

パン！ パン！ パン！ パン！

男の腰と女の尻が景気よく打ち合わされる。

「ダメだダメだ、と言っているくせに、ヴィルヘルミナさま自分から腰を使っているじゃありませんか。よっぼど欲求不満だったんですね」

「だ、だって……ああ♪ ルークのおちんぼ、大きくて固くてゴリゴリしていて、逞しすぎる♪」

ピクンピクンピクン

三度絶頂したところをみて取ったルークシードは、ヴィルヘルミナの右脚だけを抱えて



大きく上げさせると、部屋の壁にかけさせた。

「ほら、犬がおしっこをするように片脚を大きく上げてください」

「ああ、わたくしにこんな姿勢を取らせるだなんて……ああん、気持ちいい♪」

三度連続でイカされて、さらに犬のおしっこポーズという痴態を晒したことで、ついに貴婦人の仮面は剥がれた。

「やっとな素直になりましたね」

「だって、ルークがわたくしを獣にするんですもの。こんな気持ちいいおちんちんにあらがえるはずがないじゃない。ああ、いい、いいの、ルークのおちんちん気持ちいいの、ああ、ああ、あん、エルにも渡したくない。このおちんちんはわたくしのものだったのに……ああん、気持ちいい♪」

泣きながらイキまくっているヴィルヘルミナに、ルークシードはさらに踏み絵を踏ませる。

「それじゃ、あの爺のおちんちんと、俺のおちんちん、どっちが気持ちいいですか？」

「そ、そんなの、そんなの……決まっているじゃない。ルークよ、ルークのおちんちんのほうが断然気持ちいい。ルークのおちんちんが昔から一番よ。わたくし、ルークのおちんちんじゃないと気持ちよくなれないの」

国王への義理と、妹への義理。人間としての尊厳を投げ捨てた淫らな牝の姿に、ルーク

シードは満足する。

「ルーク、愛している。愛しているわ。わたくしが愛しているのは、昔も今も、あなただけよ。エルなんかよりもわたくしのほうがずっと、何倍も愛している」

「俺もです。さあ、昔みたいに、ルークのおちんちん大好き！ と叫びながらいつてくたさい」

「ああ、またイク、またイカされちゃう。ああ、ルークのおちんちん気持ちよすぎる。ルークのおちんちん、大好き——ッ」

ビクビクビク

ここからのヴィルヘルミナは、完全に獣に墮ちた。

ルークシードはさらに寝バック、横位と体勢を変えながらも容赦なく激しく腰を使って、ヴィルヘルミナをイかせ続けた。

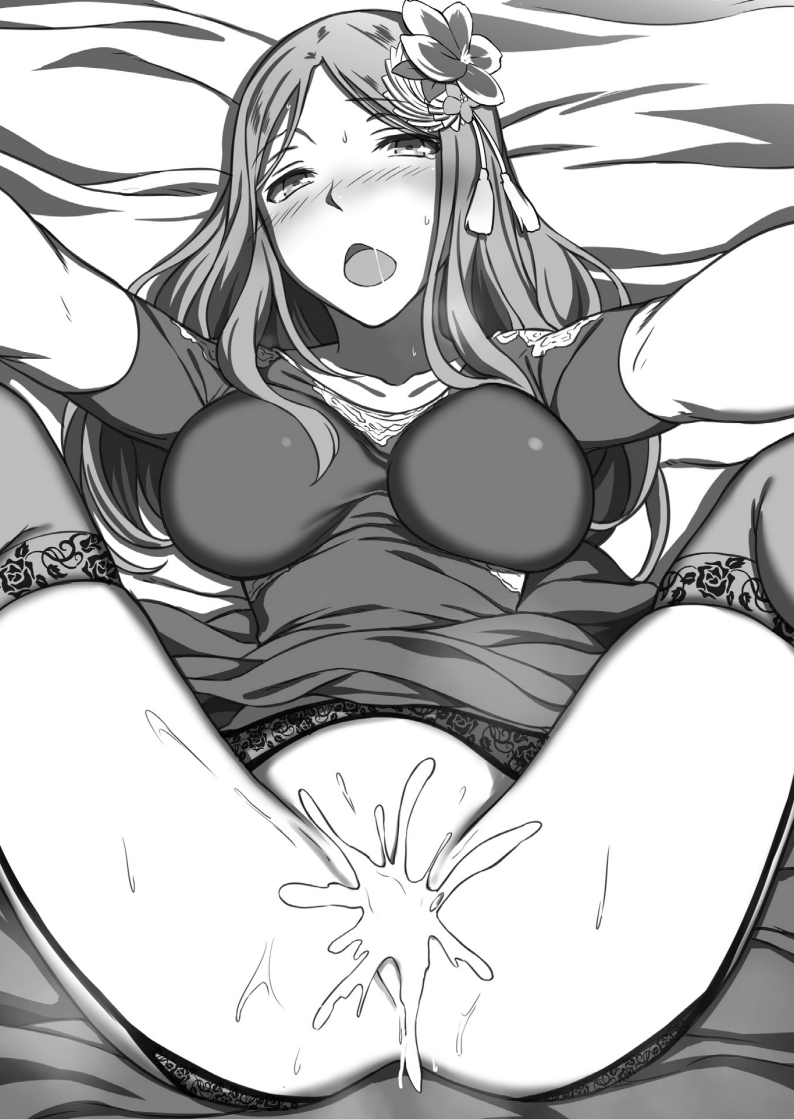
「いい、気持ちいい♪ 気持ちいい♪ 気持ちいい♪」

飽くことなく犯されたヴィルヘルミナは、泣きながらイキまくっている。

そして、再び正常位。ヴィルヘルミナの両足の足の裏は天井を向き、ヒクヒクと痙攣している。

いわゆる種付けプレスと呼ばれる体勢だ。

ルークシードが顔を下ろすと、ヴィルヘルミナは積極的に両手を伸ばし、頭を抱き、唇



を重ねてきた。

「うん、うん、うん」

ヴィルヘルミナのほうから夢中になつて舌を絡めてくる。

国王の貞淑な寵姫。廷臣に信頼される妃。国民に敬愛される美姫。それが自分の逸物の前に墮ちたのだとルークシードは悟った。

いままで我慢していた射精欲求が、一気に爆発する。

接吻を解き、顔をあげたルークシードが宣言する。

「そろそろイきますよ」

「ま、まって！ 中に出すのだけは、それだけはやめて！ 外に、外に出して！」

ここに至つて再びヴィルヘルミナに最後の理性が働いたようだ。

「ダメです。久しぶりに俺の子種を、子宮でたっぷり飲んでください。そして、そのまま妊娠しちゃってください」

あざ笑いながらルークシードは逸物を思い切り押し込んだ。

ゴリと亀頭部の先端に、コリコリとした軟骨のような子宮口が触れる。

「あ、刺さっている。子宮に刺さっているわ。や、やめて。そんなところで射精されたら、わたくし……ひいいい!!!」

ドビュドビュドビュ

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**